

た職業安定所のみならず、民間職業紹介所や学校でも行われている。こうした機関における職業相談にも応用が可能であると考えられるため、こうした点からも本書は重要な知見を与えることになるであろう。

よしだ・けいこ 桃山学院大学経済学部講師。労働経済専攻。

読書ノート

佐藤 博樹・小泉 静子 著

『不安定雇用という虚像』

——パート・フリーター・派遣の実像

中野 麻美

(弁護士)

非正規雇用は4割の大半に乗る勢いで増加し、常用代替が進んでいる。スポット派遣を生計の基盤にしている若者たちの実態も注目を浴び、非正規雇用は「ワーキングプア」の代名詞となり、不安定低賃金雇用としての側面に焦点があてられるようになった。そんな折、『不安定雇用という虚像』は、非正規雇用を働き方の多様な選択肢としてポジティブにとらえ、多様性を尊重し、人々がそうした働き方を選択できるようにして、仕事や役割にふさわしい待遇を確保していく必要を唱えている。非正規雇用は、契約の短時間性、有期性、間接雇用性の一つまたは複数の組み合わせによって成り立つ雇用形態であるが、これらの類型ごとに労働者のニーズや選択のポジティブな側面を把握し、生活や社会の将来の可能性につなげる接着剤を用意することは、労働政策の重要な課題といえる。その点で、各種調査に表れた非正規雇用で働く人たちのニーズがどこにあるかを分析し、「多様性の尊重」というにふさわしい新しいシステムを展望しようとする本書の主眼は理解できる。しかし、これによって「不安定雇用」を虚像となしうるか、については疑問なしとしない。

まず、何が働き手のニーズであるかは、働き手を取りまく生活と文化の反映であり、各種アンケートに対する回答も実は多様性をその中に含んでいて非常に奥深い。「選択」に表れた行動の外形のみから推し量れないことが非常に多いことは、労働相談の現場に身を置く者として日々痛感させられることで



●勁草書房

2007年11月刊
B6版・171頁・2100円
(税込)

●さとう・ひろき 東京大学社会科学研究所教授。
●こいずみ・しずこ 元株式会社リクルートワークス研究所主任研究員。

ある。「満足している」という回答がまさにそれであって、非正規雇用の身分的ともいえる固定性と正規雇用との大きな格差を前に、「気持ちを切り替えないければ働けない」「格差がある分だけ働かない」という選択に向かうことがいかに多いことだろう。それを数量化して説明するものはないのだが、その結果としての「現状に満足」という回答をその言葉通りのものとして分析対象とすることへの違和感は免れない。

人は、生きるために、差別や暴力、不正を受け入れることがよくあるものだが、「受け入れることへの納得」や「自分に言い聞かせた満足」が「解消ないし改善すべきもの」として自覚されるには、「挑んで変えることが可能だ」という理性の獲得が必要だ。それだから、「満足している」という調査回答は、その言葉通りポジティブには受け止められない側面がある。本書も、主婦パートの時間給について「妥当と思う」が最も多いことを指摘しながら、安いと思うものも決して少なくなく、不満は自分のスキル評価が高いほど多くなるといった、前述のような問題の端緒をつかんでいる。しかし、その傾向が

何によるものか、「賃金に満足」の深部にあるものを可視化できているわけではない。

また、非正規雇用に指摘される「企業との包括無定量な支配（拘束）」からの解放といった（短時間であって残業がない，有期や派遣であって契約本位に好きな時に働ける）ポジティブな評価の反面で，経済的自立が不可能で，明日の生活がみえないという低賃金不安定雇用としての側面をとらえる座標軸も問題となる。企業からの拘束性を排して契約本位に働く「労働からの自由」が，低賃金不安定雇用と引き換えに成り立つことを容認するのでは，非正規雇用の反対形相としての正規雇用の深刻な側面は可視化できないだろうし，日本型雇用＝正規雇用システムの何を改善するのか，その方向性は見えてこないのではないだろうか。むしろ，「均等待遇」の名の下に低位平準化を後押しすることになりかねず，

これでは未来の展望への接着剤とはいえなくなってしまふ。

そもそも人間の生活と労働にとって，自立と安定性は欠かせない価値である。非正規雇用の低賃金不安定雇用としての実態や，そうした契約の締結を拒否できない自然人としての脆弱性を無視できないことは，誰もが認めるのだろうが，「多様性の尊重」であるとか「多様な選択肢」の用意がそれらを克服する処方箋となりうるのか。

本書は，労働における「自己決定」と雇用・労働条件の公正決定を当然の前提とするのだろうが，非正規雇用がそうした価値を実現することなど不可能に近いくらいに困難な買い叩きの構造をもっていること，それを人々がどう克服しているのかという非常に重い課題のあることを再認識させる。